

IV-1

骨髓腫患者における T リンパ球サブセットの意義

澤村守夫¹、松本守生¹、小川孔幸¹、磯田 淳¹、村上博和²

国立病院機構西群馬病院血液内科¹、群馬大学大学院医学系研究科保健学科専攻²

【目的】細胞性免疫不全は骨髓腫患者の予後に影響すると考えられる。後方視的に骨髓腫患者における T リンパ球サブセットの意義を検討した。

【方法】治療前に末梢 T リンパ球検査 (CD4、CD8、CD4+CD45RA+、CD4+CD45RA-) を行った 1995 年 1 月以降の未治療骨髓腫患者 77 例を対象とした。病期で I 期 10 例、II 期 24 例、III 期 43 例。自家末梢血幹細胞移植施行例は 27 例。T リンパ球サブセット絶対数と血清アルブミン濃度、 γ 2 ミクログロブリン濃度等の相関を検討した。生存分析は Kaplan-Meier 法を用いた。

【結果】CD4 と CD4+CD45RA- 絶対数の 2 者はそれぞれ血清アルブミン濃度と相関を認めたが、CD8 や CD4+CD45RA+ 絶対数は血清アルブミン濃度との間に相関関係は認められなかった。CD4、CD4+CD45RA+、CD4+CD45RA- 絶対数の 3 者はそれぞれ γ 2 ミクログロブリン濃度と相関を認めたが、CD8 絶対数と γ 2 ミクログロブリン濃度の間には相関関係は認められなかった。CD8 絶対数 400/ μ l 未満、以上での生存分析を行った結果、自家末梢血幹細胞移植施行例では有意差が認められた (生存期間中央値 979 日対 2320 日、 $p=0.008$)。一方、移植非施行例では生存期間に有意差は認められなかった (生存期間中央値 2181 日対 1249 日、 $p=0.289$)。CD4、CD4+CD45RA+、CD4+CD45RA- 絶対数の差異の検討では生存期間への影響は認められなかった。

【結論】CD8 リンパ球絶対数が、骨髓腫の自家末梢血幹細胞移植施行例の予後不良因子である可能性が示唆された。